

# ‘It’ — その意味と機能

安 武 知 子

## 1. はじめに

英語には、次に示すような様々な ‘it’ 構文が存在する。

- (1) a. It's hot.  
b. It just started to rain.
- (2) a. It's late.  
b. It's Tuesday.
- (3) a. How far is it to the city hall?  
b. It is 6 miles to Oxford.
- (4) a. It's dark in here.  
b. It's inspiring here at MIT.
- (5) a. It seems that he is ill.  
b. It appears to me that John is happy.
- (6) a. Is it a fact that you are going to be married?  
b. I think it a pity that you could not come.
- (7) a. It was not easy to get fresh water.  
b. The fog made it difficult to calculate the distance.
- (8) a. It's no use crying over spilt milk.  
b. You must find it dull living here all by yourself.
- (9) a. It was an umbrella that John bought at the store.  
b. It was my punching him that annoyed Bill.

(1) — (9) の構文の構造上・機能上の特徴については、これまで色々な分類や、名付けが行なわれてきた。<sup>1</sup> ただ一つ共通している点は、ここでの ‘it’ はすべて、それ自体としては何の意味ももたない、無内容な項目であり、単に、統語上の体裁を整えるという目的のために挿入されている。いわば穴埋めの要素であると考えられてきたことである。もちろん、これらの構文のいくつかについて、‘it’ は全く無意味なのではなく、漠然

としたものではあっても、何らかの指示 (referent) をもつと考えた文法家もいる。たとえば, Jespersen (*Philosophy*, p. 241) は, (1) のような天候表現にみられる ‘it’ は「自然の大中性体」(conceptional neuter)を表すという考えを述べているし, Kruisinga (*Handbook* § 1002 f, 1009, 2077) には, (1) — (8) は基本的に同じ ‘it’ を含む構造であり, そこでの ‘it’ は, 意味上は全く無意味であるか, もしくは漠然としたものを指しているという, (いささか歯切れの悪い) 主張がみられる。

本稿の目的は, (1) — (9) の構文に生じている ‘it’ は, すべて ‘he’, ‘she’, ‘they’ の仲間の指示代名詞 (referential pronoun) であり, 単に形を整えるという目的のために統語的に挿入された, 穴埋め要素ではないということ, および, ‘it’ はその固有素性として, 「中性」([+Neutral]), 「単数」([+Singular]) という二つの素性だけをもち, 「定性」(definiteness) については何の価ももちあわせていない, ということを論証することである。

一般に, 言語表現を研究する際には, 個々の文中での要素と要素の結びつき方だけに着目するだけではなく, それぞれの文の発せられる文脈や場面の状況をも考慮に入れなければならない。‘it’ の「特殊用法」を扱う際にも同様のことがいえよう。これまでの研究は, 個々の文を文脈から切り離した形で分析しようとしたものであり, また, 統語形式に固執しようとした傾向がみられる。本稿の議論は, 語用論的, 機能中心的観点を導入したものである。

## 2. これまでのおもな研究

### 2.1. 分類に関して

上記, (1) — (9) にあげた構文中の ‘it’ に対して, これまでに様々な呼び名が, その各々に対して与えられてきており, 文法家によって, 扱い方がバラバラであるというのが実情である。しかし, 伝統的には, 次のような三つのカテゴリーに分けて考えるというのがふつうであった。

#### (10) a. 非人称の ‘it’ (Impersonal *it*)

b. 予備の 'it' (Preparatory *it*)

c. 強調構文の 'it'

これらの分類が、明瞭に弁別できる性格のものでないことは、都度に指摘されてきたところである。たとえば、Kruisinga (*op. cit.*) は、(10a), (10b), (10c) を同じものであるとして、全部をひっくるめた形で、「形式的 'it' (Formal *it*)」と呼んでいるし、Curme (*Syntax*, p. 10ff) は、(10b) と (10c) は発生的に同じものであると考えている。また、(5) に類する表現は、伝統文法では (10a) に属するものとして、(1), (2), (3) と同列に扱われるが、変形文法の立場では、(10b) に属すると考え、(6), (7), (8) と平行的に分析されるのがふつうである。<sup>2</sup> さらに、(4) のタイプの表現については、「天候・時間・距離」を表すタイプと区別がし難い面を考慮すれば (10a) に含められるべきであると考えられるし、意味的に後続のものを受けていると解釈するならば (10b) に分類されることになるだろう。

この歴史的混乱の事実が、'it' の特異な用法について、いかに諸説入り乱れており、結論の定まらないものであるかを示すものであろう。そして詰まるところ、現代英語におけるこれらの 'it' の用法を、お互いに異質なものであるとして弁別しようとする自体が徒労に終る可能性を示唆するものと考えられる。

## 2.2. 意味と指示性に関して

'it' 構文の意味解釈上の問題についてのこれまでの提案を概括するならば、(1) — (9) のタイプのいずれの場合も 'it' はそれ自体としては何の意味ももたないとするのが大勢であった。<sup>3</sup> 「意味がない」ということは、どういうことなのであろうか。「意味解釈上、何の役割も果たさない」ととると、「指示するものがない」ということになってしまうが、そうになると意見が分かれてくる。

まず、非人称の 'it' については、指すものはないとするのが一般に支配的であった。その中で、前節で言及した Jespersen の説は注目に価する。また、Chafe (1970, p. 101) は、「取り巻く」(Ambient) という概

念を導入して、(1), (2) のタイプの表現を特徴づけようとしている。Chafe のこの考え方には、Bolinger (1978, pp. 78-9) も指摘しているように、Ambient の概念を動詞に属するものと考えている点など、修正の必要な面もあるが、少なくとも、‘it’ の性質について名前が与えられたのは一歩前進であった。さらに、安井 (1974b) は、(1), (4) のタイプの文について「われわれを、いわば、取り巻くようにして遍在している現象を表わす文」であると述べている。これは、まさしく、‘it’ の指示するものに言及した表現である。にもかかわらず、「Ambient な現象は、主概念を欠くものであり…表面構造における主語 it は、あとから、何らかの方式で、形を整えるためにそう入されたもの…」と述べている点では、伝統的な説明に立ち戻ってしまっている。

外置文の ‘it’ (予備の ‘it’), 分裂文の ‘it’ (強調構文の ‘it’) に関しては後続の句・節を指すと考えるのが支配的であった。この傾向は現在まで続いている。そんな中で、この分析に対して最初に疑問を投げかけたのは、Kruisinga (*op. cit.*) であった。彼は、上述のように、いわゆる非人称の ‘it’ と予備の ‘it’ とを同じものと考えており、後者の場合、後続の不定詞・動名詞・節は、先行する主要節に対する補足的要員と考える立場をとっている。これは、画期的な新説であったはずであるが、それまでの説に取って代わるまでにはならなかった。何故かというとその理由は、Kruisinga の新説は、‘it’ の性質に関する取り組み方が不十分で、前節で述べたような、「意味上はまったく無意味であるか、もしくは、漠然としたものを指している」という、きわめてあいまいな説明にとどまっていたところに原因がある。そもそも二つのものを同一視するからには、両者に共通する統一的特性を指摘する必要があるはずなのに、それが無い。それゆえ Kruisinga のせっきくの先駆者的知見も、説得力に欠けるものとなってしまったのである。ところで、Kruisinga のこの考え方を受けついできると考えられる数少ない分析の一つに Zandvoort (*Handbook* § 379) がある。そこでもまた、予備の ‘it’ に後続する不定詞句や節を真主語〔目的語〕とする考え方には無理がある、という指摘がみられる。が、それだ

けである。‘it’の性質について Kruisinga を越える分析はみられない。

ところで、(4), (5) のタイプの ‘it’ については、それらを非人称の ‘it’ として扱うか、それとも、外置文の ‘it’ とみなすかによって指示性に関する考え方にも違いが出てくる。前者の立場では、これらの ‘it’ は指示するものは何もないということになるし、後者の立場では、後続の句・節を指すということになる。

### 2.3. Bolinger (1977) の説

Bolinger は、それまでの分析が、基本的に、天候表現 (weather expression, いわゆる非人称の ‘it’) とコピー代名詞 (pronominal copy, 外置文 (分裂文を含む)) とを別個のものとしてきたのに対し、その両者は同一のものであり、しかも、‘he’, ‘she’, ‘they’ と同列の指示代名詞であるという主張を展開している。すなわち、(1) — (9) にあらわれた ‘it’ はすべて、次の文 (11) における ‘it’ と同じものであるというのである。

(11) Where is my key? It's under the table,

Bolinger の議論は、極めて多岐に亘る豊富な具係的例文に基づいており、説得力のあるものである。

Bolinger の論点は、おおよそ、次のように要約される。

- (12) a. 指示代名詞 ‘it’ は、何らかの前もっての情報があると考えられるときにのみ、それに言及して用いられる。したがって指示をもつ。  
b. ‘it’ があるかないかによって意味に違いがでてくる。  
c. ‘it’ は可能な限り最大限の「一般的意味」(generality of meaning) を有する定名詞相当語 (definite nominal) であり、唯一の制限は、「中性」(neuter) であるという点だけである。
- (12) の論点は、次のような Bolinger の基本的考え方に基づいている。
- (13) ‘it’ の性質と用法を正しく把握し、説明するためには、  
a. (広義の) 文脈に対する考慮が不可欠である。  
b. 意味の一般性を意味の欠除と取り違えてはならない。  
c. 厳密な統語論上の説明のみに固執してはならない。

この態度は、とりもなおさず、それまでの伝統文法、生成文法相方の立場からの 'it' に対するアプローチの限界を、明快に指摘するものであった。

Bolinger の論点を順次略述してゆくことにしたい。まず、(12a) についてであるが、たとえば、(14) の例を参照されたい。

(14) \*I do not believe it that the election hurt them.

これは、それだけを独立に考えた場合には非文と判断される例であるが「ある人々が選挙で傷つく」ことが話題となっているような文脈の中で発話されるならば容認可能である。この文は、たとえば、談話の冒頭には生じ得ないが、他人の意見に異議を唱えようとする場合には用いられ得るのである。そのような場合、'it' は、この文に先立って存在している 'that the election hurt them' という情報に言及していると考えるのである。これは、談話の中に明白な言明が実際に存在している場合に限らない。たとえば、

(1a) It's hot. (暑い)

(15) It's hot down here. (ここは暑い)

天候表現においては、'it' が何を指すかといえ、その場の状況からわかり切った、あたりまえのもの (obviousness) を指すと考えられる。一般に (1a) のように言うときは、気温について言っていることは明らかであり、それを自分と相手に前もってわかっている情報とみなすのである。(15) のように、後からそれを限定するような表現が付けられる時は、話し手は「(他の場所と比較した) その場の気温」を指すのであるという特定化を行っているのである。同様の分析が、「時間」・「距離」・「環境」などに関する表現にも適用される、このように考えると、(16) のような 'it' との有意義な一般化が可能となる。

(16) a. Stop it! (what you are obviously doing).

b. Don't do it! (what you are obviously about to do).

c. Come off it! (what you are obviously insisting on).

さらに、to 不定詞構文に関しても同様である。次の例を参照されたい。

(17) a. How is it in your room?

— It's hard to study.

b. How is it in your room ?

— \* To study is hard.

(17a) と (17b) を比べると, 'it' が 'to study is hard' を指していると考えerるのには無理があるのがわかる。'it' は, 先行する潜在的情報 (この場合は, 部屋の状況) に言及しているのである。

(12b) の論点 — 'it' がある場合とない場合とでは 意味に違いが出てくるといふ点に関しては, たとえば, 次の (18) の質問に対して, (19a) のように答えた場合と, (19b) のように答えた場合とを比較してみると明らかにわかる。

(18) What do you think of running him as a candidate ?

(19) a. To run him as a candidate would be a good idea.

b. It would be a good idea to do that.

c. \*To do that would be a good idea.

(19a) の場合には, 相手の言葉に言及するというよりも, 自分の頭の中でその問題を思いめぐらしており, あたかも, 自分の考えであるかのように扱っている。一方 (19b) のように答えた場合には, 'it' は, 相手の言葉を受けており, それに応じた解釈を受ける。ところで (19c) のようには言えない。何故ならば, 'that' は前方照応の解釈を要求するので, 話し手は, 相手の言ったことに言及していることになるが, それならば 'it' を用いた (19b) の構造が要求されるからである。

最後に (12c) にあげた 論点 — 'it' は中性の定名詞相当語であるという主張についてであるが, これは, 'it' が, 叙実的述語 (factive predicate) と共に生ずることが多く, また, "the fact," "the story," "the news," "the idea" などの定名詞句と, しばしば 交替可能であるという 観察に基づくものである。(20), (21), (22) はその例である。

(20) a. I resent it that you take that attitude.

b. I resent the fact that you take that attitude.

(21) a. I intend to make it public that I am a candidate

b. I intend to make the news public that I am a candidate

- (22) a. They finally got it that I meant them no harm.  
 b. They finally got the idea that I meant no harm.

Bolinger は, 'it' は定冠詞に対応する中性代名詞である (*It is the pronominal neuter counterpart of the definite article*) と断言している。

以上, Bolinger の説について概観してきた。その論点はほとんどが十分に納得のいくものである。しかし, 問題が全然ないわけではない。特にここで問題にしたいのは, 最後の (12c) の主張のうちの, 定性に関する議論である。次節以降において, 'it' の意味と機能について詳しく考察しながら, この点について再検討を行っていきたい。議論の出発点となっているのは, 次のような疑問である。すなわち, 「'it' は既知情報に言及している」というとき, それは, 自動的に, 「'it' の指示対象はその存在が前提されている, あるいは, 命題の場合は, その真が前提となっている」ということを意味しているのであろうかという点である。

### 3. 既知・定性・前提

前節で紹介した, 「'it' は前もっての何らかの情報があるときに限って, それに言及して用いられうるのである」という Bolinger の主張の是非を論ずる際には, 情報の「既知」・「新」<sup>4</sup> の概念について詳しく考えてみる必要がある。同様に, 'it' が定代名詞であるという主張の正当性を論ずる際には, 定性・不定性の概念を詳しく検討することが, まずもって求められるべきである。さらに, これと関連して, 「前提」の概念の明確化, すなわち, 存在の有無, 命題の真偽に関する前提が存在するということは何を意味するかが, 改めて問われることになる。

#### 3.1. 情報の既知・新の概念

現実の言語表現を分析していく場合, 前述の如く, 一つ一つの文の中での要素と要素の関係だけに着目していたのではその機能を正しく把握することはとうていできない。実際には, 次のような観点からの考察



が、文の構造や意味の理解に不可欠である。

- (23) a. 認識の主体としての話し手と相手の存在
- b. その文に先行する言語上の文脈
- c. 発話の場面の物理的状況
- d. 世界についての常識的知識

このうち (23c) と (23d) は、これまでは、言語外の (extra linguistic, 状況上の、事実上での) 文脈というような表現で、一つにまとめて考えられがちであった。<sup>5</sup> これらを二つに分けることの意義は本稿の主要な論点の一つである。最初に、情報の既知・新の決定に参加するのは、上記のうち (23a), (23b), (23c) の三要素であるという点を論じたい。

言語は、現実には話し手が相手との間で一定の話題についてかわす表現であり、相互にどんな認識を持っているかを吟味することは大切なことである。ある情報を既知として扱うか、新として扱うかを決定するのは、あくまでも話し手の主観的判断である。誰からみても客観的に明らかなことのみが既知とされるわけではない。したがって、実際には、発話の時点において聞き手にとって初耳の情報も、話し手が、それを相手の意識の中にある知識であると判断するならば既知扱いされ得るのである。<sup>6</sup> 言語表現というものは、必ず、誰かが誰かに向かって行なったものであるからには、「我」とか「汝」とかが明示的にあらわれていない時にも、話し手と聞き手がいることを常に考慮すべきである。

- (24) a. He can't understand that you dislike him.
- b. He can't understand it that you dislike him.

(Bolinger, 1977)

(24a) と (24b) は、異なった解釈を受ける。‘it’ が生じている (24b) においては、「君が彼を嫌っている」ということは旧知の話題であり、一方、(24a) では、そのことは、それまで相手の意識にのぼっておらず、この文が発話される時点においてはじめて話題となっていると解釈される。これらの文の話し手は、その点を意識して言葉を使っているのである。ここで重要なのは、「君が彼を嫌っている」という事実は、当事者である聞き手

(=君)には、旧知の事実であったかも知れないし、それまでは全く意識にのぼったことがなく、その場で、話し手によって初めて持ち出された話題であるかも知れないということである。いずれの場合であっても、話し手は聞き手の側の実際の事情がどうであれ、自分の判断・想定に基づいて(24a)と(24b)の形を使い分けるのである。次に(25)の二つの文を比較してみよう。

(25) a. It is fortunate that he is here !

b. ? That he is here is fortunate !

ここには表面上、‘I’も‘you’もあらわれていない。しかし、このような場合も、話し手と聞き手の役割を無視することはできない。話し手が(25a)によって言明しているのは、自分と相手の眼前の事実、すなわち、「彼が今ここにいること」に関する感想である。‘he’という代名詞が用いられているのであるから、それが誰であるかは、談話の文脈あるいはその場の状況から分かっているはずであるし、その「彼」に関する目の前(here)の事実と言及しているのであるから、それが何についてであるかは、聞き手にとってもわかりきったものとして、‘it’で話を切り出しているのである。「よかったなあ」と言っておいてから、「彼が今ここにいる」と、念のための説明を付け足しているのである。一方、(25b)は、眼前の明白な事実と言及しているはずなのに、わざわざそれを口にして、あたかも自分の考えであり、頭の中で思いめぐらしていることであるかのように述べているので、不自然な感じがするのである。聞き手にとって明らかに既知である情報と言及するときには代用形を用いるのがふつうである。

‘it’が、天候・時間・距離・状況などに言及して用いられる場合にも同様のことが言える。

(1) a. It's hot.

b. It's just started to rain.

(2) a. It's late.

b. It's Tuesday.

(3) a. How far is it to the city hall ?

b. It is 6 miles to Oxford.

- (4) a. It's dark in here.  
b. It's inspiring here at MIT.

いずれの場合も、話し手は一定の文脈・場面の中でこれらの文を発している  
のであり、自分が何に言及しているかは、相手にすぐにそれとわかる、  
明白なものであると判断しているのである。

このことから、一般に、次のようなことがいえる。

- (26) 'it' は既知情報に言及して用いられる代名詞である。既知情報とは、  
発話の時点において、話し手が相手の意識の中にあると想定する知識  
である。

ところで、(26) は、他の指示代名詞 'he', 'she', 'they' にも同様にあては  
まる。たとえば、次の (27) の文は、話し手が 'he', 'she', 'them' が誰、  
あるいは何を指しているか既に相手にわかっていると考えているときに発  
せられる。

- (29) He thinks that she loves them.

各々の指示対象が相手にわかりにくい、あるいは、誤解されたり、混乱さ  
れたりする恐れのある場合には、固有名詞なり定名詞表現が用いられるは  
ずである。

ところが他の代名詞にはなくて 'it' だけに特有の性質がある。それは、  
事・物・人などに言及できるだけでなく、命題にも言及できるという点  
である。これは重要な機能であるが、この点についての認識は、これまで  
極めて不十分であった。そのために、かえって、'it' の機能が不当に無視  
され続ける大きな原因の一つともなってきた。

さて、(26) において、「既知情報とは、話し手が発話の時点において相手  
の意識の中にあると想定する知識である」と言ったが、話し手にそのよう  
な判断の材料を提供しているものには2種類ある。先行する言語上の文脈  
(=23 b) と、発話の場面の物理的状況 (=23 c) である。'it' の含まれた  
文の意味解釈を行う際にも、個々の文をコンテクストから抽出して分析の  
対象としていたのでは、2種類の材料のどちらの情報に拠るものかは判断  
し難い場合が多い。たとえば、

(1a) It's hot.

(1a) の文だけを眺めただけでは、極めてあいまいな解釈しかできない。先行する言語上の文脈、たとえば、‘How is your soup?’ というような問いに答えて、「熱い」と答えているのか、それとも、発話の場の気温について「暑い」と言っているのか決定できないのである。これは、言語上場面上の文脈・脈絡を考慮に入れなければ ‘it’ の意味するところが決定できない典型的な例である。さらに、

(24b) He can't understand it that you dislike him.

(24b) にも、同様なあいまい性が存在している。ここで ‘it’ によって言及されているのは、「君が彼を嫌っていること」である。その情報を話し手は既知として扱っているのである。このような場合にも二つの可能性が考えられる。一つは、先行する言語上のコンテキスト中でそれに関する言明が行なわれ、実際に話題となっている場合である。もう一つは、その内容が相手自身の感情であることから、相手のそぶりから、それを推察して当然相手の意識にあるものとして、既知扱いする場合である。いずれにしても、コンテキストを補えば、正確なところは判明する。

次に (3) に類する表現について再検討してみる。これらも、前もっての脈絡がない場面で突然発せられることは考えられない。

(3) a. How far is it to the city hall?

b. It is 6 miles to Oxford.

市役所や、オックスフォードに関する事柄が話題となっているような場面でのみ、これらの文は生じ得るのであり、そのような脈絡なしに (3a) のような問いが発せられたり、(3b) のような言明が行われたりすることはない。

(27) は、同一文中にそれが明示的に現れている例である。

(27) If one were to take a train trip from Los Angeles, through Chicago, to New York, it would take at least two full days and three full nights.

また、次の (28), (29) のような、通例、イディオムとして扱われる表現につ

いても、同じことがいえる。

(28) Which do you prefer, a woman doctor or a man doctor?  
— It depends. I prefer a male surgeon but a woman pediatrician.

(29) It's in to drink a glass of wine, so if you want to be considered in, don't sit there all night ordering scotch and sodas.

(28) における 'It depends' は、相手の質問の中味「医者には男がいいか女がいいか」に言及した表現である。したがって、これは、言語上の文脈に由来する既知情報に言及している。一方、(29) における 'It's in' は、後続の 'to drink a glass of wine' を受けていると一般に考えられているが、この場合も、その場面において、「(周りにいる人々が) ワインを飲んでいる」という状況がなければ、このような文は発することはできない。これは、'it' が発話の場面の物理的状況を指している例である。

最後に、既知の概念と、「世界についてのあたりまえの知識」(=2d) との関連について考えてみたい。まず、「地球が丸い」ということは、ふつうの人間ならば誰もが知っている常識である。それでは、何の前ぶれもなく、(30a) を突然発話することができるかというところではない。

- (30) a. It was pointed out by Galileo Galilei that the earth is round.  
b. Galileo Galilei pointed out that the earth is round.

(30a) のような文が用いられうるのは、何らかの文脈上、場面上の根拠に基づいて、「地球が丸い」という話題が、相手の意識の中に存在している、と判断される場合だけである。それがないときには (30b) のように言うのがふつうである。また、「コロンブスがアメリカを発見したのは1492年である」というのは、ふつう誰もが知っている歴史上の事実であるからと言って、突然、(31a) と言うことはできない。

- (31) a. It is a fact that Columbus discovered America in 1492.  
b. That Columbus discovered America in 1492 is a fact.

「コロンプスのアメリカ発見」についての話題が前もって相手の頭の中になく想定されるときには、(31 b) のように言わざるを得ない。

以上の考察から、世界についての常識的知識は、「既知概念」の形成には関わっていないということがわかる。

### 3.2. 定性・不定性の概念と前提 (presupposition) の概念

前節では、‘it’ の用法に関連して、それが談話あるいは場面の脈絡の中での既知情報に言及して用いられているという点について論じてきた。次に、‘it’ と定性・不定性との関連について考察する。

定性・不定性は、英語の表面構造においては、定冠詞・不定冠詞という直接的で明白な形で表示される概念である。話し手は ‘the dog’ と言うとき、自分の念頭にあるのがどの犬であるか相手にわかっていると判断している。自分も相手も特定の指示対象を知っている—自分の頭の中にある犬が相手にとって同定可能である—と判断しているのである (Chafe, 1976) 次のような場合を比較してみよう。

(32) a. I hit a dog this morning.

b. I hit the dog this morning.

(32) のどちらの文においても、話し手は特定の犬に言及している。違いは、相手がその存在を同定できると判断する場合には (32 b), そうでないときには (32 a) が使われるという点にある。定性・不定性の決定に際して (23) にあげた四つの要素がどのように関わっているか考えてみよう。特定の人・物・事が、「定」であるかどうか—相手にとって同定可能であるかどうか—の判断は話し手が行うものであり、相手の事情が実際どのようなかは直接には関係しない。定性・不定性に関しても認識の主体としての話し手の判断 (23 a) は重要な要素である。一般に、定性確立のための条件には色々あると言われているが、その種類分けは、学者によって様々である。<sup>8</sup> しかし、基本的には、(23 b), (23 c), (23 d) の三種の根拠があるという説明で十分である。すなわち、話し手は、言語上の文脈 (=23

b)と発話の場面の状況(=23c)(32)についていえば、このどちらである可能性もある)、および世界についての常識(=23d)('the sun' 'the moon'などの場合)を基にして、ある物〔人・事〕が相手にとって同定可能であるかどうかを判断するのである。

どの種類の根拠に基づいてであれ、話し手がある特定物に言及してそれに定冠詞をつけるということは、その特定の指示対象の存在を「前提」として話をしているということを意味する。<sup>9</sup>たとえば(32b)においては'the dog'は、その存在があらかじめ前提となっていると解釈される。一方、不定冠詞の用いられている(32a)のような場合は、'a dog'によって言及される特定の犬の存在がこの文の中で(前提ではなく)断言(assert)されている。この意味において、「定性」・「不定性」の概念は、「前提」の概念と切り離せない関係にある。

ここで注意すべき要点は、定性・不定性の概念が、あくまでも文中に生じた名詞句の指示対象に属するものであるということである。定名詞句によって文(命題)に言及がなされているときは、そのような文(命題)が「存在する」ということが、自動的に前提となっているのであり、その「内容の真」が、前提されているのではない。次のような文を参照されたい。

(33) a. I intend to make the news public that I am a candidate. (Bolinger, 1977)

b. I want to make clear the fact that I don't intend to participate (Kiparsky & Kiparsky, 1970)

(33a)において、'the news'という定名詞句によって前提されているのはある特定のニュースの存在であり、その内容の真偽についての前提ではない。一方、(33b)においてはthat補文の内容の真も前提されているが、その前提は、定冠詞に由来するものではなく、'make clear'という述語が叙実的(factive)であるという理由のためのものである。この場合は、たまたま定冠詞も'fact'(事実)という語い項目自体の意味も、補文の真の前提に貢献しているように思われるが、実際には、それは付随

的なものにすぎない。補文の真偽を決定する役目をしているのは、あくまでも述語のもつ〔± Factive〕という素性である。‘the fact’ という名詞句がなくても (34 a), (34 b) のどちらの文においても補文の真は前提となっている。

(34) a. They discovered that it was difficult to make ends meet.

b. I see that they have started building the new library.

(Hooper, 1976)

これは、discover も see も補文の真を前提する叙実的述語であるからである。

### 3.3. 情報の既知・新と名詞句の定性・不定性との関係

情報の既知・新の概念と、名詞句の定性・不定性の概念とはしばしば重なり合うことがあり、この二つが、密接に関連していることは否定できない。(32) の例を考えてみると、(32 a) の場合には、話し手は、自分の頭の中に思い描いている犬が相手には 同定不可能と判断して、‘a dog’ という不定名詞表現を用いているが、同時に、その犬についての情報が相手にとって新であると想定していると解釈されるのがふつうである。一方、(32 b) においては、話し手は、自分の考えている特定の犬が相手にとって同定可能であると考えているし、そのことは、とりもなおさず、相手の頭の中にその犬が意識されているという判断にもつながっている。

このように、ある指示対象が、相手にとって同定不可能であるという判断は、それが相手の意識にのぼっていないという判断と結びつきやすく、反対に、相手にとって同定可能であるという判断は、それが相手にとって既知であるという判断と結びつきやすいということは真実である。しかし二つの概念の座標軸は異なっている。次の例にみるように、既知と不定性新と定性が結びつくことはごくふつうにあり得ることである。

(35) I saw an eagle this morning. Sally saw one, too.

$\left[ \begin{array}{c} -\text{def} \\ +\text{given} \end{array} \right]$  (Chafe, 1978)



(36) Don't go in there, chum. The dog will bite you.

[+def  
±given] (Hawkins, 1978)

(35) において、one は、既知情報 'an eagle' に言及しているが、不定形であり、その指示対象の存在は、前提となっていない。（「サリーも鷲を一匹見た」ということによってある特定の鷲の存在が断言されているだけである。）一方、(36) においては、'the dog' という定名詞表現の指示対象は、聞き手にとって既知であってもよいし、新であってもよい。この文は、特定の犬が、相手に意識されている場合はもちろん、全くそんな犬がいることを知らなかった場合にも使える。いずれにせよ「その中にいる犬」という脈絡で同定可能であると判断しているのである。さらに次のような例を考察してみよう。

(37) What John did was kiss Mary.

(37) において、'Mary' は焦点の位置に生じており、新しい情報の一部を成している。しかし、固有名詞は、定義上 [+Definite] である。そこで、ここでの 'Mary' には新情報と定性とが同居していることになる。

既知と定性が同一の概念でないことは、その確立のための条件の違いにもあらわれている、既に述べたことであるが、どちらも、話し手の主體的判断に基づく概念であり、先行する言語上の文脈と、発話の場面の状況はこれらの概念の決定に関わってくる。しかしながら、語用論的知識は定性の確立に関する場合だけに関係し、情報が既知として扱われるかどうかの決定には関係しない。たとえば、'the sun', 'the earth' は定性表現であるが、その決定は、「太陽」、「地球」と言った場合に、それらがふつうは一つしか存在しないので、指示対象は世界についての常識に基づいて同定可能であるという理由でなされているものである。これらの名詞句が発せられる時点で聞き手がそれらを意識しているかどうかには全く関係がない。定性必ずしも既知ならざる例である。

さて、既知と新、定性と不定性は別個の概念であるということは、'it' の用法を考える場合にも重要なポイントとなる。

(11) Where is my key? It's under the table.

(11) のように言うとき、‘it’ によって指し示されるものは同定可能である。2 番目の文の代わりに ‘The key is under the table’ というように定名詞表現で ‘it’ を置き換えた形を用いることもできる。それでは、必らずどんな場合にもこのような ‘it’ と定名詞表現の交替は、可能なのであろうか。次の例を参照されたい。

(38) A beaver builds dams. It is a very clever animal.

ここでは ‘it’ は総称名詞 ‘a beaver’ を受けている。このような場合には ‘it’ は既知情報に言及しているが、特定のものの存在を前提としていない。そもそも特定の指示対象について述べている文ではないのであり、その存在は前提も断言もされていない。そのような類の動物が存在するといふことが前提となっているだけである。この場合には、‘it’ を定名詞表現で置き換えることはできない。同様のことが、(39) のような場合にもいえる。

(39) If the unicorn were a possible animal, it would certainly  
be a herbivore. (Hankamer & Sag, 1976)

(39) においては、‘it’ の指示対象は、その類の存在もメンバーの存在も、前提も断言もされていない。したがって ‘it’ は定名詞表現で置き換えられない。

以上の考察から ‘it’ は定名詞表現とは異なり、既知情報に言及するだけで、指示対象の存在の前提には関係していないということがわかる。存在が前提となっているものの場合はもちろん、そのような前提のないものに言及しても用いられ得るからである。このことから次のようなことが言える。

(40) ‘it’ は定性・不定性に関しては中立である。

(40) は、また、他の指示代名詞についても言えることである。次の (41) の例文において、‘he’ も ‘they’ も特定の指示対象に言及し、その存在を前提とした表現ではない。先行する文脈から、あるいは、その場の状況から得られる既知情報を受けているだけである。

- (41) a. I want to marry a doctor. He must be tall and good-looking. (Kuno, 1970)
- b. They say the government is going to resign.

上記、3.1. 節において述べたように、‘it’ は名詞句に言及するだけでなく、文（命題）にも言及して用いられるという特別な機能を有する代名詞である。そこで、次に、文（命題）に言及している‘it’の用法について考察してみよう。(42)の文においては‘it’が言及している命題はその真が前提されていない。

- (42) It is obvious that John could not come.

ここでは、「ジョンが来れなかった」という情報が前もって存在しているだけである。それが事実である場合もちろん可能であるが、そのような前提がない場合にも用いられうる形である。同様に、

- (5a) It seems that he is ill.

(5a)においても、「彼が病気だ」というのは、その真が前提されている命題ではない。ところで(30)の場合には、命題の真は前提されていると解釈される。

- (30) It was pointed out by Galileo Galilei that the earth is round.
- しかし、ここにおける命題の真の前提は、‘point out’という叙実的述語に由来するものであり、‘it’がそれに関わっているわけではない。同様に、

- (31) It's a fact that Columbus discovered America in 1492.

(31)においても、‘it’は「コロンブスが1492年にアメリカを発見した」という話題が、発話の場面において既知であるということを示しているだけである。それが真であるという前提は、‘be a fact’という述語から生まれるものである。したがって、(43)のようなことが言える。

- (43) ‘it’は、既知である「物」、「人」、「事」、「命題」に言及して用いられるが、その「物」、「人」、「事」の存在を前提したり、「命題」の真を前提する役目は担わない。

ここで、命題の真をそれだけで前提する役目を担う名詞相当語は何かというところが問題となってくる。そのような表現は、‘the fact’ だけである。定名詞表現ではあっても、‘the idea’, ‘the news’, ‘the story’ などはいずれもそのような「概念」, 「ニュース」, 「話」の存在を前提するが、その内容の真にはかかわっていない。(33) の例参照。)

#### 4. 情報の流れ・外置文・客観性

次のような事実は (43) を裏付ける証拠と考えられるものである。

- (44) a. The UPI reported that Smith had arrived.  
b. It was reported by the UPI that Smith had arrived.  
c. That Smith had arrived was reported by the UPI.

Kiparsky & Kiparsky (1970) によれば、(40a), (40b) では、話し手は補文の内容の真・偽に関して何も特定の態度を示していないが、(40c) では通例その補文の内容が真であると前提しているという。この説明を基に、主語（文頭）の位置に置かれた補文に与えられる特別な性質についての論議がなされたりしているが、<sup>11</sup> しかし主語（文頭）の位置が (44c) のような意味合いを自動的に生み出すわけではない。

- (25) a. It is fortunate that he is here !  
b. ? That he is here is fortunate !

(25b) は、補文が主語の位置にあるためにかえって不自然な文になってしまっている。‘be fortunate’ は叙実的述語であり、補文がどこに置かれていようとそれには関わりなく、その真を前提するはずであるが、(25b) がおかしいのは何故であろうか。上記 3.1. 節でみてきたように「彼が今ここにいる」という眼前の明白な事実に言及するのに、あたかもそれが自分の考えでもあるかのように述べているので不自然な感じがするのである。明らかに既知である情報に言及して発話するときには、代用形 ‘it’ を用いて切りだす (25a) のような形がふつうなのである。したがってこのような事実に基づいて (44) を吟味し直すと、(44c) にみられる補文の内容が真であるという前提は、彼らの主張する、[±Factive] という述

語の素性に由来する補文の真の前提とは性格の異なるものであるということがわかる。

(44b), (44c) が受身文であるという点に注目されたい。一般に受身文は、ふつうなら目的語になるものを文の出発点となる位置に置き、それを既知扱いにして、それについての叙述(=新しい情報の提供)を行なうものである。それと同時に、(あるいは、別に、)ふつうなら主語になるものを、新しい情報として扱いたいときに 'by NP' の形でわざわざ文尾にもっていく場合も考えられる。(44c) では、補文が文頭に置かれ(受身文の主語となっており)既知情報としての扱いを受けている。既知情報であるならば 'it' を用いて、(44b) のように言うことも可能であり、そうする方が情報の焦点をはっきりさせるためにも望ましいし、ふつうのやり方なのである。それを、あえて、代用形を用いずに命題内容を繰り返して述べる形をとっている。(44c) のもつ特別な意味合いはここから生まれるものであると考えられる。もう既に話題になっている内容を改めて繰り返しているのであり、そのために補文の内容が真であることに対する話し手の強い確信のほどがうかがわれるのである。

そこで、'it' の生じている (44b) に目を移すならば、ここでは補文の真偽に関する話し手の態度が何らうかがわれない。これは、まさに、'it' が命題の真の前提には関わっていないという (43) の主張を裏付ける事実である。

さて、補文を主語とする受身文がすべて (44c) の場合と同様の前提を含むというわけではない。次のような例もある。

- (45) a. Somebody will announce (it) that the president has been indicted.  
b. It will be announced that the president has been indicted.  
c. \*That the president has been indicted will be announced. (Bolinger, 1977)

(45c) は、補文の真が前提されているどころか、非文となってしまう。その原因は、'will be announced' という述部の情報量が少ないところ

にある。この場合は動作主も不定 (*indefinite*) であるという理由で削除されているし、述部に新情報を担い焦点の位置に生じ得るに足る情報量がないので、既にその真が前提となっている既知命題を受けて、それについて何かを述べるという役目を果たし得ないのである。一方、同じ受身形でも外置文である (45b) は適格文である。この文には、補文の真に関する前提が存在しないので、主文述部の情報量が少なくても、その分だけ情報の焦点が補文の方に移り得るのである。このタイプの文は、既知であったはずの情報の再確認的意味の文と解釈される。その場合、主文述語は挿入句的立場にあるといえる。ふつうは、補文はあくまで補文であって、主たる断言は主文述部が担うものであるが、主文述部の情報量が少ないときに限って、‘that’ に導かれた補文 (SVO の形を有し、時制文であるもの) の場合には、このように、補文が主たる断言を行ない、主文は挿入句的に解釈されるという現実がある。(Hooper & Thompson, 1973)。

次に、(5) に類する文について考察してみよう。

- (5) a. It seems that he is ill.
- b. It appears to me that John is happy.
- (46) a. \*That he is ill seems.
- b. \*That John is happy seems to me.

(46) が非文であるのは、この種の述語の情報量が少ないためである。したがって主文述部は焦点とはなり得ない。相対的な情報量は補文の方が多く担っており、したがって (5) の主文述部は、法助辞的、文副詞的に解釈される。補文は既知情報に焦点が当てられたものであり、前もっての情報の確認的意味を担っていると考えられる。このような場合にも ‘it’ はその場の状況から推察される情報 (結局は補文の内容と同じもの) を指している。

- (47) a. He seems to be ill.
- b. John appears happy to me.

(5) と (47) を比較した場合、(5) の方には客観的意味合いが強い。それは、‘it’ があることによって、その場の状況から客観的に観察されるところを述べているという含意が存在するからである。Postal (1974) は、上昇変

形 (Raising) は、語用論的にみれば、文に主観的個人的意味合いを与えると指摘しているが、それは 'it' を用いた形が客観的であるという事実と表裏一体を成すものである。

(48) a. It happens that he's a real creep.

b. He happens to be a real creep. (Riddle, 1975)

Riddle (op, cit.) は、(48a) は客観的であり、that 以下は他からの独立の証拠によって証明が与えられた事実であるという解釈を受け、補文の真は含意されているが、(48b) の方は、'he' という指示対象に対する話し手の個人的見解であるという指摘を行っている。このことも、'it' が既知情報に言及しているという事実を裏付ける強力な証拠である。次の (49) の場合も全く同様の差異が観察される。

(49) a. It is certain that she'll leave.

b. She is certain to leave.

(49a) の方は、客観的事実を述べているという意味合いがあるが、(49b) には、話者の主観的意見であるという解釈が与えられる。

Tough 構文の場合にも、一般の上昇変形の場合と同様のことがいえる。

(50) a. It is easy to please John.

b. John is easy to please.

Tough 移動がかかった (50b) の文は、ジョンについての話者の主観的判断を述べたものであると解されるが、(50a) の方は、客観的事実を根拠にした叙述であるという印象を与える。これは、'it' がある場合には既知情報に言及しているという解釈が与えられるからである。

## 5. 日本語の場合

日本語には、上で考察の対象となってきた 'it' に相当する代名詞はない。何故ないのか、という点、その原因は、日本語では、わかりきったものは省略するというのが原則であり、わざわざ「それ」と言わないのがふつうであるからである。その証拠には、(1) — (8) の文を日本語にするとき 'it' は無視される。

- (1') a. 暑い。  
b. ちょうど雨が降り出した。
- (2') a. 遅い。  
b. 火曜日です。
- (3') a. どのくらいの距離ですか、市役所までは。  
b. 6 マイルです。オックスフォードまで。
- (4') a. 暗いね、ここは。  
b. いい刺激になりますね、ここ、MITは。
- (5') a. どうも彼は病气らしい。  
b. みたところ彼は幸福らしい。
- (6') a. 結婚するって本当ですか。  
b. 君が来られないなんて残念だ。
- (7') a. 容易ではなかった、新しい水を確保するのは。  
b. 霧のために測量が困難だった。
- (8') a. 覆水盆に返らず。  
b. たった一人でここに住んでるなんて退屈でしょう。
- (1) — (8) については、これでよいが、(9) のような 分裂文 の場合には、ちょっと問題がある。

- (9) a. It was an umbrella that John bought at the store.  
b. It was my punching him that annoyed Bill.

ふつうは、これに対して (51) のような解釈が与えられる。

- (51) a. ジョンがその店で買ったのは傘だった。  
b. ビルがおこったのは私が彼をなぐったからだ。

しかし、ここに困ったことがあるのである。というのは、これでは、(9) は、(52) のような疑似分裂文 (Pseudo-cleft sentence) と全く同じ意味になってしまうからである。

- (52) a. What John bought at the store was an umbrella  
b. What annoyed Bill was my punching him.

いずれの構文においても「ジョンが何かを買った」、「ビルがおこった」



ということは、既知であり、主文述部が新情報を伝えている。しかし、分裂文と疑似分裂文は、置換可能な構文ではない。

(51) にあたるのはむしろ (52) の構造である。(9) に対する日本語の表現は次のような後置文が適当と考えられる。

- (53) a. 傘だった、ジョンがその店で買ったのは。  
b. 私が彼をなぐったからだ、ビルがおこったのは。

このように考えるならば、次の (54) における同一指示解釈の可能性の差が対応する日本文においてもそのまま表現することができる。

- (54) a. \*What annoyed him was my punching Bill.  
b. It was my punching him that annoyed Bill. (=9b)  
c. What annoyed Bill was my punching him.  
d. ?It was my punching Bill that annoyed him.

(Bickerton, 1975)

- (55) a. \*彼がおこったのは、私がビルをなぐったからだ。  
b. 私が彼をなぐったからだ、ビルがおこったのは。  
c. ビルがおこったのは、私が彼をなぐったからだ。  
d. ?私がビルをなぐったからだ、彼がおこったのは。

(\* ? は、Bill と him の同一指示解釈の可能性の度合をあらわす。同一の人物を指さない解釈では、これらはいずれも容認可能である。)

日本語には 'it' に相当するものがないと言ったが、それでは「それ(その)」という表現は、一体、何なのであろうか。これは、英語の〔+definite〕な直示詞 'that' に相当するものであると考えられる。「それ(その)」と言う場合にはその指示対象の存在は前提されている。

- (56) a. それは何ですか?  
b. What's that?  
c. ?What's it?

(56a) に対応する英文は (56b) であり、(56c) ではない。これは、先行する文脈の中のものに言及している場合でも、発話の場面の中に存在する具体物に言及している場合でも同じである。ハムレットは、(57a) の

ように独白しており、(57b) のようには言っていない。

(57) a. To be, or not to be, that is the question.

b. To be, or not to be, it is the question.

‘it’ を用いたのではハムレットの悩みは伝わらない。‘that’ が用いられているからこそ彼の悩みが実在のものであることがわかり、苦しみが伝わってくるのである。

## 6. ま と め

本稿では、‘it’ の性質と機能について主に意味論的、語用論的観点から考察してきた。論点をまとめると次のようになる。

(i) ‘it’ は既知情報に言及して用いられる指示代名詞である。

(ii) ‘it’ のもつ素性は [+3rd Person] [+Singular] [+Neutral] である。

(iii) ‘it’ は [±Definite] に関しては何の価値も持たない。

すべての用法の ‘it’ をこのような形で同一のものと認定することは、英語から無意味な要素が一つなくなることを意味する。それは文法の簡素化にもつながり、望ましいことである。しかし、そのように考えた場合、外置文、分裂文などにみられる後続要素を統語的にどう ‘it’ と結びつけて説明するのかという問題が残る。この点に関しては、Hankamer & Sag (1976) のように、文を受ける ‘it’ を基底部で直接生成するという方法が、有望であると考えられる。

## 注

1. たとえば, Preparatory ‘it’ (Jespersen; *Essentials* §16, I<sub>6</sub>), Formal subject [object] (Onions; *Syntax* §2.228), Anticipatory ‘it’ (Curme; *Syntax* p. 10ff.) Provisional ‘it’ (Kruisinga; *Handbook* §1003), Expletive ‘it’ (Bryant; *Grammar* §160) など、学者によって様々な名称が提唱されている。『また Chomsky (1980c, p. 23) では、Pleuastic redundant ‘it’ という表現がみられる。また、これらの名称によってカバーされる用法の範囲も一定してはいない。

2. 一番最近のものでは, Chomsky (*op. cit.* p. 23, 30) を参照されたい。
3. たとえば, Sweet (*N. E. G.* § 257) は, この 'it' を 'the unmeaning it' と言い, Curme (*op. cit.* p. 8) は 'practically meaningless' と言っている。
4. 「既知」・「新」は, Chafe (1976) の 'given', 'new' に当たるものである。これらは, Chafe (1970) においては 'old information', 'new information' となっていたものを少し改訂した表現になっている。古くは, 松下大三郎 (1924) に「旧観念」・「新観念」という表現があり, 大野 (1978) は, 「既知」・「未知」という表現を用いているし, また, 久野 (1978) は, 「古いインフォメーション」・「新しいインフォメーション」と呼んでいるが, これらは, すべて, 本質的に同じものである。
5. Allerton (1975) は, 削除や代用形の使用に関して, 語用論的, 機能中心的観点から考察を行なっているが, 場面的な脈絡の概念のとらえ方が不十分である。
6. この点については, Chafe (1976) の議論を参照されたい。
7. これらは Curme (*op. cit.* p. 7) では, Situation 'it' と呼ばれているものである。
8. たとえば, Chafe (1976) は定性の確立のための条件として5種類を認めているし, Hawkins (1978) は, 'the' の用法を6つの下位型に分類している。
9. 名詞句の指示対象の存在の形態についての議論は, Bickerton (1975 a) を参照されたい。
10. 同上参照。
11. Hooper & Thompson (1973), 佐藤 (1980) の議論を参照されたい。

## REFERENCES

- Allerton, D. J. 1975. "Deletion and proform reduction," *JL* 11. 213-37.
- Bickerton, D. 1975a. "Two levels of logical presupposition," *CLS* 11. 48-59.
- . 1975. "Some assertions about presuppositions about pronominalization," *Papers from the Parasession on Functionalism*. 24-35.
- Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.
- Chafe, W. L. 1970. *Meaning and the Structure of Language*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- . 1976. "Givenness, contrastiveness, [definiteness, subjects, topics, and point of view," *Papers from the Parasession on Functionalism*. 25-56.

- Hankamer, J. and I. Sag. 1976. "Deep and surface anaphora," *LI* 7. 391-428.
- Hooper, J. B. 1975. "On assertive predicates," in J. P. Kimball (ed.) *Syntax and Semantics*, vol. 5. 91-124. New York: Academic Press.
- and S. A. Thompson. 1973. "On the applicability of root transformations," *LI* 4. 465-97.
- Kiparsky, P. and C. Kiparsky, 1970. "Fact," in M. Bierwisch and K. E. Heidolph (eds.) *Progress in Linguistics*. 143-73. The Hague: Mouton.
- Kuno, S. (久野 暲) 1975. "Three perspectives in the Functional approach to syntax," *Papers from the Parasession on Functionalism*. 276-336.
- . 1978. 『談話の文法』大修館書店。
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- 佐藤ちゑ子, 1980. 「言語使用から見た外置文の性質」『英語学』22. 47-67.
- 坪本 篤朗, 1979. 「有標の位置と含意」『英語学』21. 28-44.
- 安井 稔, 1974b. 「主語とは何か」『英語学の世界』25-57. 大修館書店。